

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

タブノキ (*Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc.)

吉野知明 (エスペックミック株式会社) tyoshino@especmic.co.jp



タブノキ (*Machilus thunbergii*) との出会いは学生時代を過ぎた静岡市の日本平丘陵の林道脇であった。タブノキの葉は単葉で鋸歯はなく表面は濃い緑色を呈し、花も果実も遠目に目立つほどでもない。見慣れてくるとそうでもないが、樹木を覚え始めた頃には初心者泣かせの樹木であった。

タブノキは通常は高さ 15~20 m, 直径 50 cm, 大きいものは樹高 30 m, 直径 3.5 m に達するクスノキ科タブノキ属の常緑広葉樹である²⁾。東北地方 (青森県・岩手県) 以南の本州, 四国, 九州, 沖縄から台湾, 朝鮮半島南部に分布している^{2,7)}。諸説あるだろうが, 日本で最大のタブノキは推定樹齢 1300 年, 幹回り直径 9.15 m に達する千葉県香取市宇賀神社の「府馬の大クス」(国天然記念物) とされており⁴⁾、日本の照葉樹林を代表する樹種のひとつである²⁾。タブノキの木材は建築材, 工芸材料, 船舶関連材のほか, 線香の材料や染料として古くから利用されてきた⁸⁾。さらには, 能登地方では, 魂の宿る木として神聖視されており, 気多大社の「入らずの森」や鎌宮諏訪神社の鎌打ち神事のご神木として, 信仰・祭祀の木として知られている^{1,8)}。民俗学者の折口信夫をはじめ, タブノキのもつ奥深さにひきつけられる人も多い^{1,8)}。

またタブノキの果実は比較的鳥類にも利用されているようである。かつて千葉県浦安市の行徳鳥獣保護区では当初はほとんど本木植生が成立していなかったが, 30 年後にはクロマツ林が形成されトベラやエノキなどとともにタブノキの実生も多数定着していることが確認された⁹⁾。これらはおそらく鳥類によって運ばれたものであろう。タブノキの果実は関東から東海地方では概ね 6 月下旬から 7 月中旬に黒く熟す。種子を拾い集めに訪問すると樹上でムクドリやヒヨドリ, ハシブトガラスが果実を飲み込んでいることもしばしばである。

タブノキは耐潮性に優れ, 防火樹としても知られており^{1,3)}、海岸付近の工場緑地や公園等に植栽され³⁾、暖地ではコンテナ苗としての栽培・流通も一般的である。最近では NPO 等でも栽培されることがある⁸⁾。タブノキの繁殖は比較的容易で, 結実している個体の樹冠下を探索すると鳥が排泄した種子やついでにみ損ねた果実を採取することができる。果肉のついていないものは取り除き, 採り播きすると 2~3 週間で発芽してくる。永田・万木 (1990) によるとタブノキの亜熱帯地域産の苗と暖温帯地域産の苗では頂芽の休眠度合が異なり, 亜熱帯地域産のタブノキ苗を暖温帯に持ってくると

冬季に頂芽が開き, 枯死しやすいことを指摘している⁵⁾。同じタブノキであっても, 地域により生態的特性が異なることがあるようだ。他地域の個体を栽培する際は留意したい。タブノキの栽培環境は 1 月の平均気温が 0℃ 以上の場所が良いとされ, 強い霜や寒風により葉先が傷むため寒冷紗等の防寒が必要とされている⁶⁾。愛知県の尾北地域では, タブノキの幼苗は野外に配置すると 1 月~3 月の霜によって葉が変色する被害が生じやすい。そのため, 霜が降りやすい地域では, ハウス内で越冬させるのが良い。タブノキを植栽した事例においても, 霜の降りやすい内陸地では, 葉が傷み, 障害がひどい場合には枯死することもある。タブノキの植栽を検討する際には, その苗の原産地や冬季の霜害の影響も考慮すべき事項であろう。

タブノキが緑化木として用いられる機会は今後も少なくないと思われるが, 自然樹形を活かし大木らしく成長するのがやはりふさわしいのではないだろうか。タブノキの生育に適した河川沿いや沿海の立地は, 産業活動にも利用されやすい場所であるが, タブノキが伸び伸びと育つ緑地環境をあえて確保しておくことも重要であろう。

引用文献

- 1) 藤平朝雄 (2008) タブノキは残った能登の霊木物語, 能登カルチャークラブ, 50 pp.
- 2) 橋詰隼人・中田銀佐久・新里孝和・染郷正孝・滝川貞夫・内村悦三 (1993) 図説実用樹木学, 朝倉書店, p. 157.
- 3) 国土交通省都市局公園緑地・景観課 (2011) 改訂版緑化樹木ガイドブックポケット版, 日本緑化センター・日本植木協会編, 建設物価調査会, p. 114.
- 4) 宮誠而 (2013) 列島自然めぐり日本一の巨木図鑑, 文一総合出版, pp. 90-91.
- 5) 永田洋・万木豊 (1990) 樹木の休眠に関する研究 (IV) タブノキの生態型と休眠の相関関係, 三重大生物資源紀要 4: 147-156.
- 6) 日本植木協会 (1989) 緑化樹木の生産技術, 第 1 集常緑広葉樹編, 日本植木協会企画・編集, 日本緑化センター, pp. 69-70.
- 7) 佐竹義輔ほか編 (2001) 日本の野生植物木本 I. 平凡社, p. 116.
- 8) 山形健介 (2014) ものと人間の文化史 165 タブノキ, 293 pp.
- 9) 吉野知明 (2005) 行徳野鳥保護区の樹木 (第 3 回), 行徳野鳥観察会友の会 153: 10-11.